

シリーズ・世界の図書館 (1)

大英図書館にて 天下の孤本『天草版平家物語』との出会い

池上秋彦[㊦]

(一)

1996年度在外研究(短期)を許されて、本学と交流協定を結んでいるリンシェーピング(スウェーデン)・シェフィールド(イギリス)両大学を訪れるべく準備を進めていた私の手元に、大英図書館東洋部日本コレクションのヘッドであるユー イン・ブラウン女史ほかの講演会とブラウン御夫妻を囲むレセプションの案内状が届いた。これも、ポジティブ・マイクロフィッシュ版『大英図書館



ユーイン・ブラウン女史と筆者
大英博物館内円形閲覧室の回廊にて

[㊦] いけがみ・あきひこ/文学部教授/日本文学

所蔵日本古版本集成』(第一期、紀伊国屋書店・本の友社共同企画)を本学図書館に収蔵するに当たって、私が図書委員の一人としていささかの関わりをもったことに因るものと思われる。その講演は同館所蔵の日本コレクションに関するもので、国語学を専攻する者として大いに関心があったが、一滴の酒も飲めずあまり知らぬ人と話しをするのが得意でない私にとってレセプションに出席するのは、気の進まない話であった。しかし今まで影印本でしか触れたことの無い『天草版平家物語』(原名は大英図書館蔵本の背にFEIQE MONOGATARI、扉にはFEIQENO MONOGATARIとある。以下『ヘイケ』と記す。)の原本をこの目で見るためには絶好の機会、みすみすこれを逃す手は無いと考え、思い切って出席することに決めた。かくて、おずおずと乗り込んだレセプションの席上、紀伊国屋書店の二俣氏に頼んで本の友社ロンドン事務所のルディー・スメット氏(ベルギー人で日本語は極めて堪能)を通じて、多くの人々と談笑しておられるブラウン女史に紹介してもらった。初対面の挨拶、名刺交換の後、「以前お目に掛かったことがありますね。」という女史のいささか意外なお言葉も意に介せず、「実は私は十月にロンドンに参る予定です。その折りに大英図書館の『ヘイケ』を見せていただきたいのですが…」と切り出すと、女史は優しい笑みを浮かべられ、日本語で「どうぞ何時でもいらっしゃい。二、三日前までに私に連絡してくだされば見せてあげますよ。」とこちらが拍子抜けするくらいあっさりとおっしゃった。そして、「大勢の日本人学者が見に来られるので、このごろは少し手垢で汚れてきましたけれどもね。」と言葉を継がれたので、こちらもつい釣られて、「では私は白い手袋を用意して参ります。」とお答えしてしまった。やがて宴席もお開きとなり、私は「これで在外研究の楽しみが一つ増えた。」とほくそ笑んで帰路についた。

こうして一応『ヘイケ』の閲覧許可が口頭で得られたものの、その前提となる大英図書館のライブラリー・カードを取得するまでがなかなか面倒であった。英文の身分証明書から学長のサイン入り紹介状、写真など、私自身の分だけでなく、通訳のため同行した家内の分まで必要なものもあり、それ等をすべて揃えて渡航に関する一切の手配を依頼してあった東急観光ロンドン支店に送るまでに、多くの日数を要したため、結局、ライブ

ラリー・カード取得のための手続きがうまく行っているかどうか、確たる返事を得られぬままに日本を出発する事になってしまった。

(二)

八月一日に日本を発ってから、約二ヶ月間にわたるストックホルム、リンシェーピング両大学での調査を経て、十月初旬に第三の目的地であるシェフィールドに到着した。その翌日、東急観光ロンドン支店の大町氏から電話で、ブラウン女史には話を通してあるので直接お目に掛かってお願いするようにとの連絡があった。シェフィールド大学での調査の合間を縫ってブラウン女史と電話連絡の結果、本来ならばかなりの日数を要するラリー・カードを、女史のご配慮で、ロンドンに行ってからお目に掛かった上で、即日発効して頂けること、大英図書館は専用の建物を博物館とは別の場所に建築中であること、女史の常駐しておられる東洋部（正式名称は **Orient and India Office Collection**）はまた別のビル（**Orbit House, Blackfriars Road** と **Union Street** の交差点北側）に仮住居中であること、などがはっきりして、漸く一安心することができた。

ロンドンに移って数日経た女史とのお約束の当日、万が一にも定刻に遅れないようにと思って、時間の余裕を見てホテルを出、タクシーで **Great Russel Street** の大英博物館に向かった。意外に早く博物館に着いてみると、まだ開館までにかなり時間があるのに既に大勢の人が詰掛けており、折から開催中の中国に関する特別展示の入場券売り場には長い行列ができていて驚いた。開館時間になって、ブラウン女史に指示された正面玄関内のインフォメーション・デスク横で待つことしばし、中年の金髪女性が声を掛けて来て、「今ブラウンさんから電話があって、お宅で急用ができて一時間ほど遅れるそうです。それまで「中国展」でもご覧になってください。」と、展示場に案内して下さった。私たちは「これぞ勿怪の幸い」とゆっくり展示を見物して元の場所に帰った。やがて、日本でお目に掛かって見覚えのあるブラウン女史が来られて、まず館内の職員食堂に案内して下さった。昼食の後、女史御自ら私の分だけでなく家内の分までリサーチング・アシスタントの身分でアプリケーション・フォー

ムなどの必要書類を整えた上、担当部署まで案内して下さった。ここで「では私は用事がありますので、これで失礼いたします。」と帰られた後、写真を撮るなどして漸く憧れのライブラリー・カードを手にした時には、二人ともすっかりくたびれてしまった。話は前後するが、先刻女史の「ところで貴方の見たい本をリストアップして下さい。」とお言葉に、少しも憶せず『ヘイケ』を第一に挙げたところ、「あゝこの『ヘイケ』は今博物館の方で一般展示中ですからお見せできません。ほかの本だけで我慢してください。」と言われた時の失望が、この疲労の遠因になっていたのかも知れない。しかし、まだ閉館までには時間があるし、せっかく来たのだからと元気を出して、問題の『ヘイケ』のほか有名なロゼッタ・ストーンや数々のミイラなど目ぼしい展示品を見物してホテルに帰り着いた時は、文字通りへとへとになっていた。

翌朝十時、閲覧許可のあった書物を見るために東洋部を訪れた。この時はブラウン女史が御多忙のため、係員の人達との会話には、“リサーチング・アシスタント”のほか、たまたま同部に来ていた親切な英国人研究者の助けを借りなければならなかった。館内の特別閲覧室でゆっくり本を見た後で女史のお部屋に伺い、イギリス入国以来の数々の御親切にお礼を申し上げしばらく閑談した。その時女史は、私の言葉の端々に肝心の『ヘイケ』を見られなかった無念さを感じ取ってくださったのか、「そんなに『ヘイケ』が見たいのですか。」と聞かれた。私が即座に「もちろんです。あれを見せて頂くためにロンドンに来たのですから。」とお答えすると、しばらく考えられて、「では私が何とかして上げましょう。二、三日前までに言ってくだされば見せて上げますよ。」とおっしゃった。すっかり諦めていた『ヘイケ』閲覧が叶うことになって大喜びしたが、ロンドン滞在中のスケジュールが既にかなり詰まっていたので、直ぐに日時を決めるわけにも行かず、ただ厚く御礼を申し上げなるべく早くお返事することにして、お部屋を辞去した。ホテルに帰着後、早速家内とも相談し電話も何本か掛けるなどして日程を調整し、女史にお願いして漸く閲覧できる日時も決まったのは、帰国予定日の三日前だった。



『天草版平家物語』の扉
「日本のことばとHistoriaを習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語。」

JESVSのCOMPANHIAの
Collegio Amacusaにおいて Suu-
piorioresの御免許としてこれを板に刻む
ものなり。”

(御出世より M.D.L.XXXXII)

その当日、勇んで朝から
大英博物館へ出かけた。幾
つかの関門を通して、貴重
書閲覧室の指定された席で
待っていると、やがて係員
が『ヘイケ』を持って来て
くれた。やおら用意の白手
袋を隔てて『ヘイケ』を手

にしたその感激は、うまく言い表せないほどのものだった。

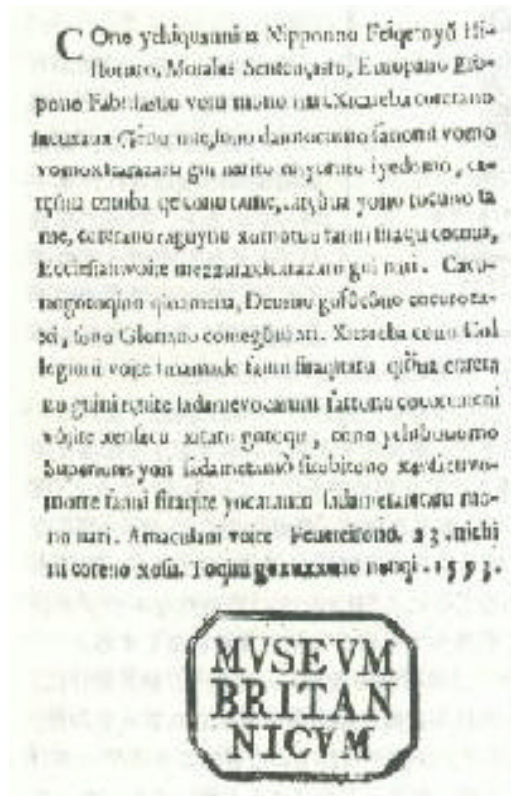
まず驚いたのは、皮表紙のつやつやした感じと”手垢の汚れ”などほとんど目立たないページの綺麗さだ。演習のテキストとしてしょっちゅう手にしている『ヘイケ』(影印本)と、今初めて手にしている『ヘイケ』(現物)では、名前は同じでも、手に感じる質感・量感は全く比べ物にならない。感激の涙にむせぶと言えば月並みで大袈裟になってしまうが、影印本に付された解題の言葉にもあるように、“日本における苛烈なキリシタン迫害の中からこの一本がよくぞ残ってくれた”という感を深くする。

たっぷり時間を掛けて『ヘイケ』の手触りを楽しんだ後で、帰りがけに、先日訪れた折に確かめてあった日本古典文学の展示室に立ち寄ってみた。本来ならページを開いた『ヘイケ』が並べられている筈のガラスケースの中に、Temporarily removed と書いたカードがぼつんと置いてあった。これを目にして私は、未だ覚めやらぬ感激と興奮の中にも、「今日この『ヘ

イケ』を目当てにここを訪れた人はどう思ったろうか。」と些かの後ろめたさを覚えつつ帰路に就いた。

(三)

以上が『ヘイケ』との初対面までの一部始終であるが、まだだいぶ紙幅に余裕があるので、蛇足は承知の上で『ヘイケ』について解説しておきたい。



"FEIQUE MONOGATARI"
の総序

この^{いちくわん}一巻には^{にっぽん}日本の feique といふ Historia と、 Morales Sentencas と、 Europa の Esopono Fabulas を押すものなり。しかればこれらの作者は Getio にて、その題目もさのみ重々しからざる儀なりと見ゆるといへども、かつらはことば稽古のため、かつらは世の徳のため、これらの類の書物を板に開くことは、Ecclesia において珍しからざる儀なり。かくのごときのきはめは、Deus の^{ほうこう}御奉公を志し、その Gloria を請ひ願ふにあり。しかれば Collegio において今まで板に開きたる^{きやう}経はこれらの儀ついて定めおかる法度の心あてに 応じて穿鑿したることく；この一部をも Superiores より定め給い人々の穿鑿をもって板に開きてよからんと定められたるものなり。天草において Feueiro の。23. 日^{にち}にこれを書す。時に御出世の年紀, 1593.

この大英図書館所蔵の一

本は十六世紀末に日本に滞在してキリスト教の布教に従事したポルトガル人宣教師たちによって、日本語教科書として天草で刊行されたものであるが、実は今回紹介した『ヘイケ』(1ページ~408ページ)のほかに、我々が子供のころに親しんだあのイソップ物語を和訳した『天草版伊曾保物語』(409ページ~506ページ、原名ESOPONO FABVLAS、略名『イソポ』)と漢籍などから金言名句を収めた『天草版金句集』(507ページ~544ページ、原名QINCXV)などと合綴した皮装雁皮紙刷りオクタボ版の小冊である。『ヘイケ』そのものの刊年は、その扉の最下行の表記により一五九二年と解されるが、合綴本總序には1593年と明記されている。また、このページの余白には大英博物館の所蔵印が押されている。序文・本文ともに、ポルトガル語式ローマ字綴りによる当時の口語体で書かれており、扉の記述の中にNIFON・FOSSVRV・FITO・FEIQE・fanのように八行子音にFを用いた例が見られるが、これは当時の八行音の音価を推定する有力な材料となるものとして甚だ興味深い。また本文に入ると、jicocu(時刻)とgigocu(地獄)、suzuri(硯)、tazzumi(鼓)のように、ジ、ヂ、ズ、ヅの”四つ仮名”を見事に書き分けているが、これは日本人の書いた狂言台本などでは「じゃ」(断定の助動詞で「ぢゃ」が正しい)「ぢゃくはい」(若輩、「じゃくはい」が正しい)のようは仮名遣いの間違いがかなり見られるのと比べて注目される。この他にも種々の点で室町時代末期、江戸時代初期の話言葉の実態を探る上での極めて貴重な資料と言えるのである。

なお『ヘイケ』などについてももっと詳しく知り度い方は次の書籍を参照されたい。

『国語学研究辞典』 佐藤喜代治編 明治書院

『天草版平家物語』 福島邦道解説 勉誠社

『ハピアン抄キリシタン版平家物語』 亀井高孝・坂田雪子 吉川弘文館

『天草版伊曾保物語』 福島邦道解説 勉誠社

『天草版伊曾保物語』 井上章 風間書房

『天草版伊曾保物語の研究』 井上章 風間書房